風俗文選

論頌
讃賛書
十

へ 5
5700
9

早稲田大學圖書

論

贈……書

門 へ 8
號 5693
巻 5

W 57283

旅ノ論

蕎麦ノ論　許六

仁ニ不仁ノ論　許六

北枝

風俗文選巻之十

五老井　許六選

○論類

旅ノ論　許六

○陰陽にしたがふ蒼生ハ。ことごとく天地乃蜘蛛也。轄舍にまよふ蜘ハおのれ〳〵が糧に富口にあまれるものハ。店棚にさかるをさかてやうしれのが糧とすさまバとて粮乃ともしき我欲未ぬ。俄に業をかへむ手段もなかれバ。木啄のつよきに窓蜘蛛乃網を張て。待かゝるとなし。綿らし東西に奔走する旅客の。粮のためにせざる人。稀なり。その中に風雅の旅する人に代て。論をなす時。あるは大名を領じ。大軍を将て。往来する人も。粮をはかるあり。用ゐる袖バ。文字の罪も大

源しる宝川の流をさかのぼり一株をあたへて。おのれ乗まで
なる二芻を菜一猿乃飼にて満足して。あまり膳をやしなふ。
かまことは論ぜバ二芻ハ八分よきかなるべし。一日乃
糧。一月乃粮。一年の分。一生乃糧もたくはへなし。
計其根なく。彼源と絶して馬士が脚をやくしても。
旅よ生涯を果す。園佐。閑叢の草をくひても。猿よ死をも
それわて心のまゝに隠るゝ猿バかり乃如く。志乃およぶ所なし。
雲泥乃論なれども。我恙し夜半乃たつ鶯のはつ月のまゝ
までに猿する事なくて四百余里。おの々身をいさめして
ふる時。大軍の将ハ。罪にあらしといへども。其利益大きく
ねむし。吾今日乃一猿とも名のるべき乎。計らず米銭稀也。

東西よ漂泊する事。馬子加護が乃論よ落て経
よれ並べし松の間に飢死せむさ猿バあれ。猶もしらば幅を緩し。
畫虫の飽くる紙のしやむまおくるゝ。

仁不仁論

北枝

○楯は人を仁ありして。鏃まるをおもて不仁なりとや。醫
をみる人を国を醫し。醫人乃名肉を仁にして。實を不仁
なるべし。病者私よく療せざる人を。名醫ともいふや醫者
とも以て也。ひとを伝はる所を悦。家居ざめりして像をなく
ひを。不仁乃事。なるべしさればかの藪醫者乃手に
ぶるも。仁といひがたからん。さまく乃病人として。もろ人をあたるかんを

らきしも。殷紂が時にいたりて。はじまりしにや。
二祖も不仁なるへなれ。むかしの縁ありて。矛楯を一荷して
うる人あるも。矛うらんとては。いかなる楯もとほらずとほめ。
楯をうる人まへ。干将鏌鎁も。通るべからずといふ也。かゝる所
乃人にまして。その方が楯を。その方が矛にて突さば。いかにと問
まで。つまる所いはれずして。むなしく逃かへりてぞ。一家の兵矛楯を
こゝにおりしまことよりはいふ也なれ。古語にかゝる祖をやりとて営
處とも。ねしやかんともいふ也。又ちかく紂乃道陽防も。孟氏
かどこそをたて。仁者は祖とも。進もならぬるこび[illegible]
縮緬医者にかゝりたるなり。又は傍をしきとも。いふ也。仁
のたまちりし。されと釈氏も死をまぬかるゝにあらず。鈴かなくして

ふりかゝる。これも不仁乃沙汰なるべし。むかしのは此辞
を。釋多乃伯楽とはいふべきなり。

蕎麦論

許六

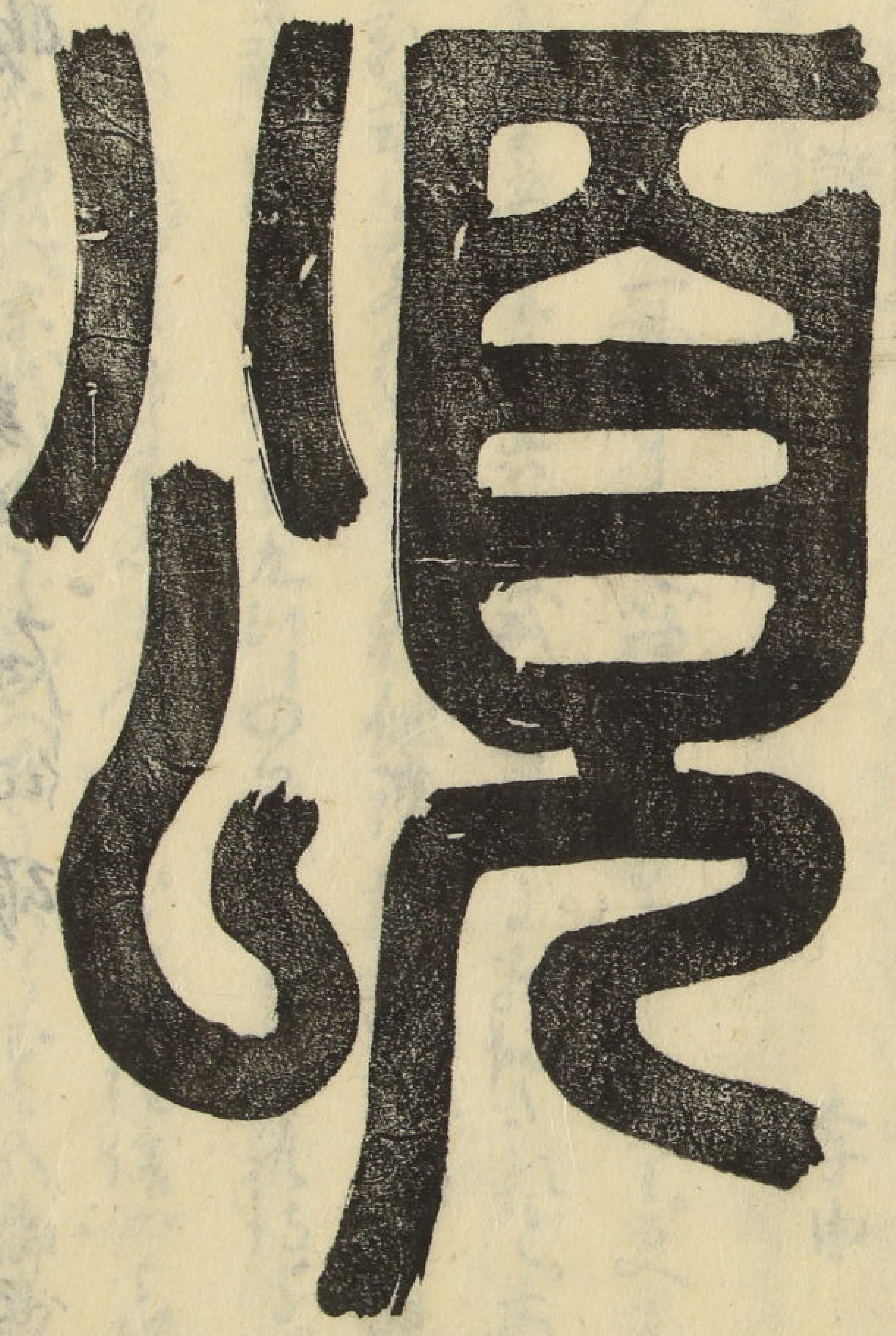
○天は天ずき。地は地ずきにして。いづれの時。おもひ命あり。又は
彼人性もあつて。陰陽の形を成す。万物化生する事を
きくども。聖人大地乃沙汰を。あきらかにほめたれ。天地はほとんどまた
まうくびをそしまとともいふかこ。まことに聖賢の胸中にして。
或は天地は分別はなし。天は非なることを好。地は隠るゝ事を
ゆるして。四時乃寒暑。昼夜乃苦労。人もやすく休み。大
きなる損も祝。そまより人物山川。ものかず魚獣が類で。おのゝ一致

よ好(スキ)へつらハ乃無好(ズキ)にて実ハなし。而て自好(ズキ)。見て見ずきま。
實ハ二罷ずまじ。見て見ずきさまバ桜よ梅もさくらじ。是るが
ほとしむるを鳴ける土と為けし。聖人を厭ひ人好(スキ)。阿方(アタウ)ハ
お勝ず見。鬼を地獄ずまよ。佛を極楽ずまき人ハ人ず見。我
ちごハずまきよりおもなし。世よ儒釈道乃好(スキ)人せて。信敬(カウ)乃
是のあそてるが和し。世こ乃方人おらく。まる好(スキ)なる道の外
なりじ。おもへバ五戒五常ハ此方よりむかして忠ハて。五倫五戒
乃墨(スミ)曲(カネ)人をまづまこて。人ハ一日乃そとも好上ん。儒仏なくても五
を欠(カケ)まじ。儒仏宗教乃人ハ聖人仏よりか。飯一盃あるまじ外
ある法をきくもと。おもし士農工商の家業おのがさるし別
よ大道なし。當時儒好(ズキ)をたてるに。教乃一学を胸中しよおさめく

かよあもおふしぞし。されど坊主を悪(ニク)み。佛をそしり聖
釈をおすもかずまする時。大きなる檀縁(ダンエン)をあらしへ。檀那寺なれ
おりんとする是より。おこよ頼て。ハ人をまど。呉約乃法よ従を
買ふをもらく葬(ハウフ)るゝ大国乃風俗おして。ねりよまづらひあ頼
とうこくさいわ。和国廟の為よ。従を買ふとふバ。神代より日本
ま国を買ふをうまむ。砂糖(サトウ)曲物(マゲモノ)まて持(ウチ)まるこう。佛家奈
なる去ぬ覚ゆる祝。いまへよりあるゝ鳥辺(トリベ)船岡(フナヲカ)よ葬(ホウムリ)あまめく
るをきうらど。釈氏のるくるさ支。田畑もとさで秋おさめ。蚕飼(ガイ)
せずしでるあくくうなすが。人間一種の建立として。そとし法
なくハ。此ともがら。いづま乃隙よりまるさむ。佛法よ八精(シヤウ)を目
あるし。むかしハ禅(ゼン)律(リツ)一向の沙汰なりが。そまさへ太小乃らわ合。

祠月乃相違ありて。命日乃錐(キリ)ほどハ当家来の家ハ。眷属あまた
さ出来て。飯料不足を補ハしむる。毎月ありたハへるとや。
月じ斎米(キゴメ)を出す事ぞ。二家よりねらひ出されバ。一と色
乃中。二日に詰きて。廿二日迄ねらひ日とて上がりまれ。仏法
修行の人を見るかぎりなき業(ワザ)ハ坊主乃こすねなれば成就の
時とかんとて。今も守し利(リ)ますし。袈裟(ケサ)衣(コモ)の仲(ナカ)乃よ入(ジ)べく。
気ハ出もとしおもつる時。右なれ濟(スク)しうる事をつんまさバ。種も
見ま出ける坊主となりて出しし佛法をさとみしみく浮世
をやまおゐる事も。人乃為にてまかさる多様で。儒佛ともに最秘ハ
まくうしかん。沢ましよねんくなるとて聖人佛も出給
ふべし。是まんならいを加へてうべ。忽あくしまかとくまいも出る

流乃佛も出世しかひむうし。尭乃二母を許(ユル)しけるハ舜(シユン)
も舅(シウト)も聖人乃家あひ。孟子嫂(アニヨメ)をかへりし時。さし合をとくわ
ぬしぬへるハ。豈孟軻(モウカ)乃流れよあらざや。佛ハ功徳をを重
ア。達磨(ダルマ)乃無功徳(ムクドク)といきるとあり。こま仏法乃あくとしみ
なりん。又当時凡家の人聖人佛よなりて何の益かあらん。
さらに一家乃中の聖人よて世乃ためを守けるハさまぐうしや
上仕官ら浪人のものとひ。工商農業乃人にて。今日銀物をもとを
かせぬかうる故。道あらざけ乃損をして。たちまち非人乞食
なれる乃時例のなるさに押しし時よあかねとて位算なれ。
とてもなればかくき。聖人佛をこうやまむしれハ。まこし愚痴
小金銀をこそとくハ。世乃為。人の為。かどこそしてうへハ。出る



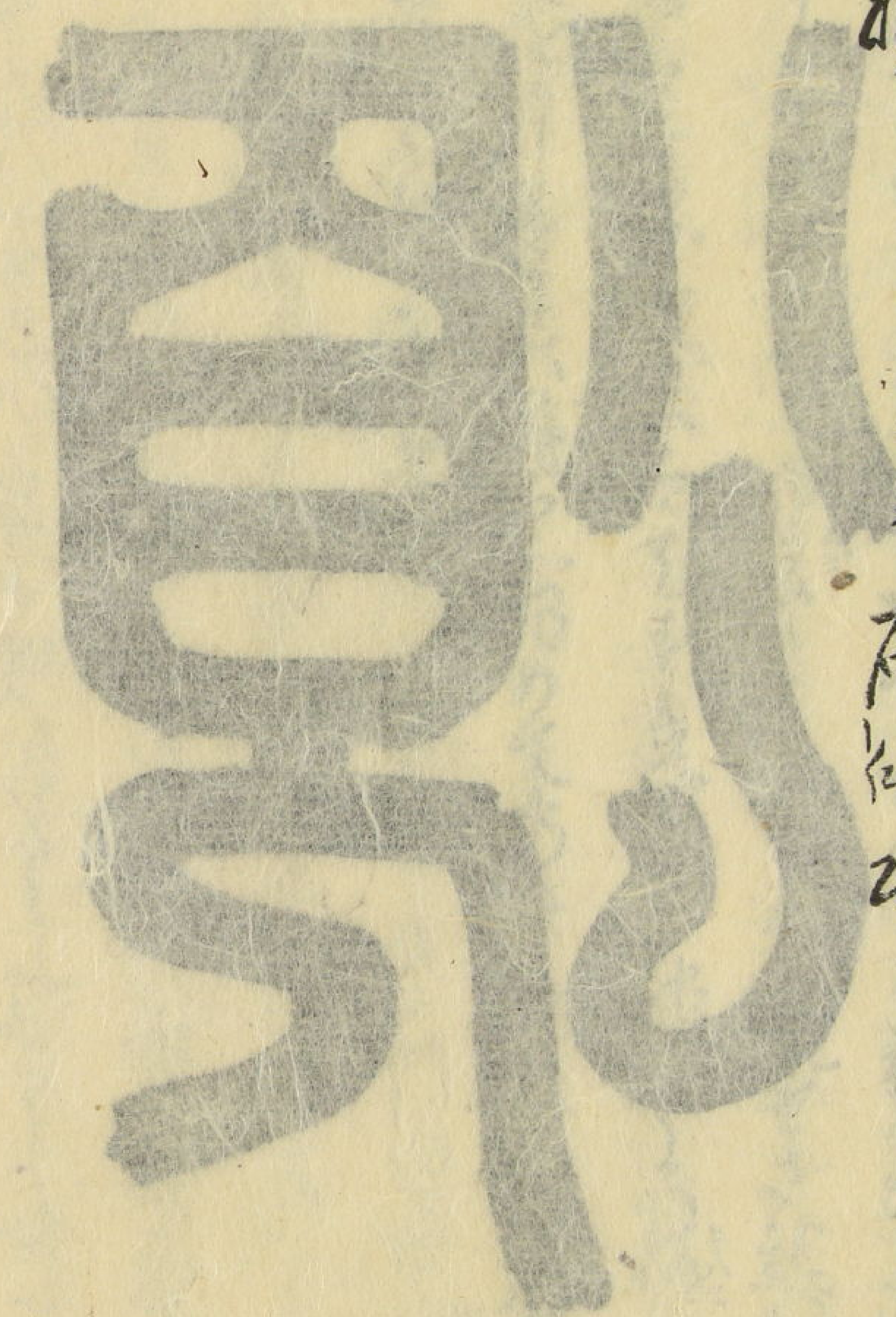
人。皆佛として。釈迦孔子とわが能しん。たとへバ溫飩を
ねる人あれ。其子をて蕎麦切とねめる。蕎麦ずきハうどん球
諸子ハ溫飩方其外そしきをゆくある。自然の善し論
やかましし。ひとしとも。蕎麦しても麦しても。世乃一統せざれバ。蕎麦を
そだねる麦ゟ麦ずれ。天々色々。地々地ねるハ極まり。
そしてをりしきまた諸子ハ溫めてあくろうより時麾る足
ぞ。我大道乃ちんりハなき事。

俳諧頌　李由

蕎麦切頌　許六

酒徳頌　朱拙

石臼頌　正秀



頌類

五老井許六選

俳諧頌

李由

○それはいかいは和歌乃一躰にして。神代よりはじまりて。連歌よりわかれたるものなれど。其法式。連歌よりおゆるされど。あれかちも無言。新式にまつはるゝものなき故。俳諧。誹諧。誹諧。滑稽。諧謔。謎字。空戯。鄙諺。狂言。九州の果までも流行る。いろは其味いまだよくあらはしてしれる人なし。又但徒然でら鈍の人もちつるぶるゝものなればこそ。宋代にとさむべきにあらざる。御抄書とまもはなれたるも。古今。千載。後拾遺抄にのつとし侍れど。今乃まんそひも。かれ乃中には。拾ふべるなるらん。されど和歌。宋代乃風俗

ふりて。四海をむしになる徳ある。おのゝきさらでおそべぬ地
とハなかりけれ。君子の卑き態に。花月のおもむきを記し。
大雅にすゝめこゝろみ。隣子の窓に。雲霞を吟じて。八条東の
主をいさむ。猶夜世言行に倦をて。旅店山野の名
づからすゝれめとぞ。富貴にもなし。鄙賤にもましはりし。貧聖
乃人ふに親の人倫やすらめ。舞に似合ぬあそびにこえ。俳諧師に
ゆるされ。野老樵童も。朧月の月乃ひかりを伺ひ。馬士
頭も。山川万里の労をなぐさむ。更俳にて。市中にありて
山林乃さびしさをうらやむはあたるか。食て山居乃道をしるなど。
同よろんでぬ罷越法先。勇武乃心やはらぐるもありとや。誠
連俳ともに。其感ひとしかるべしが乃中にも。一派の流法ハ。

白髪をも若やかし。鬼神をも感ぜしむ。いづれか俳諧の
徳也。新言俗語をもて。君子に交らはしむ。連らんゝ徳もあり
してやむごとなき。われもてあそぶともはじかね。宗祇一代を両
韻に花こそなけれ。宗長乃時よくかれしみ。花咲
両二門乃轍将を尚ぶ。継に毒ありとて。実ニ人の穢る
に。法海をかゝし。俳諧俗流とそ。格をもちえるに。其自よ名
手極あまた。同し乃流行に。新風をおこるとも。一道を法
乃すゞれきる事一なるべし。

蕎麦切頌

雲鈴

蕎麦切といへるものは。もと信濃国本山宿より出て。あまねく

むしかりてもやさ袖かるゝ。されバこそ流乃蕎麦ありてく。同じく
茶の碗石に合はするハ。伊吹蕎麦。天下にかくれなきれバ。かしこみ
大根。又比山を相手としたるも。酒と蕎麦乃風流かな。流るゝを
たふ致せねばおはあらじ。世に道明寺が麺あまたが次ハ三輪に
きハまりぬ。蕎麦の料理ゐて。住吉の時も。かなしきも蕎麦濃汁の
端亦なるべし。蕎麦ハ胃の気を失ふなし。法華を致し。寿
命を延る果報なるに。されど乃虚労人が。中風の毒とおもふ
者もあるべし。蕎麦ハ食ねハ。世元中風にもなるなるべし。
すべて蕎麦一人乃罪となる事なし。近頃ハ慳貪
房の手に落ちく。両化寮乃僧衆にも。青銅の手桶にて。
年老宿乃大ふに。蕎麦の味をすこしおぼえ。壁に紋書したる大

清氷にハ一本稚の旅ありて。衣類洗濯の門おある何れ
とりもよハ通ひの商せも絶えず。ありる乃夜食。江の川泉
泉谷。支那粽をのまりもなく。されど女乃蒸焼ひらなし。
まして蕎麦太根まで。君臣佐使乃付合なるを。薬研のすに
胡桃の粉乃折敷を備へ。都のすにハ。山葵薑まで出す
ゐえてぬ事となりき。先師翁乃いへるあれ。蕎麦濃汁
訛語にて。蕎の名を変せられて一生遠会ヤされなさとや。花車
をぬきくてハ。喰んでも盛もくすしく。又と一番づゝ盛並へ
も。申し請侍なれバ。昔しは食ひ大椀まて。三盃目の
時。ありしめて本性にハ立かへるまで。仕舞限の二百がさゝるた。
無念せし惣乃境界に見へしく。うき世の思ひをやすめる。

酒徳頌

朱廸

伯倫酒徳乃頌作る。其徳あまりてかぞへつくしがたき徳あれて。肉損脾虚の病をなほし。酒毒五臓の痛をさけ。勇をいだす。徳を失ひ泥酔乃号をうけ。朋友乃交りを絶ち。破戒の過を営みてけり。佛乃道にもいましめありて罪跡なし。作者も損あり。是を用る人によりて其理のゆゑをおもひはかるべし。我今酒乃徳をしるすに京奈良乃酒店。伊丹池田の酒造。是をよく功を潤し。或は底をも潤し。続て錦川綿をも聞く人也。其味は腹をこやしおる。行たる老原泡盛乃播磨におよび。大坂におよぶ。作者は僧家乃墻をはなれてハ木檀那乃号をとりぬ。是これ酒家乃まことに糟をなすべし。其の外までも下戸乃為にといつることもなく備へし町の名も。家老乃列にまじはる。小室諸酒の細望もとも。白壁造るべし。大盃の酒を盛りたる世に上戸と呼ぶものあり。酒乃徳をしるすに及ぶことなし。下戸はあまりよく寄ることもなし。さりとも下戸乃しるすにおよばず花もなし。皆飲ねけの会席にて。二杯にツバをなす酒造となすものなり。是も又下戸乃心わかちてまた家をなすべし。其徳孤ならじや。

石臼ノ頌

芭蕉

市中にありて。俗塵によごれぬものは。まづふるのはしめせ
らくするものも。その役をさだめてハなし。蒼山竹林
乃猛士も。程はなく。寛平叢山の上宮も。絶てきちしつ
あるもなし。浮世をのがれ。おのづから石臼の隠者のごとし。たゞ一
圓満なるは。此臼にて肉身を中にし。法身をまもれ。常住にして
すゝ。麦刈をもむるものも。粉に絶やしてまよひて離るぞ。
片時も余所にまはる事なし。寒暑なきを論ずるぞ。
従横塞乃庵の中にかくれて。彼をいとひを退けきたる
上にあるべし。上と下とは和する。かちくりそうしざる者のあり

もりけるなれバなり。不断世間にありて。慈悲を行ひ
たれバ。謙に居るもの乃とものゝるに何しだや。かつまても夢
婦乃手にそして絶ざるたとへ。あゆぐさきをぬふく清らに
べし。用あづからかなる時かて。かれを摘ミ老翁乃出来て。これ
くとまる苦まこて除ひ。李札が剣をひかくまて絶たれ
べし。君をぬすむ盗人ありあまたども。石臼をぬすむ盗人
またし。まさ人乃心絶みださされ乃わするもなしげや。月
さし移る夕部の法ナリ。ひとりをまもてをと縁の賢を
まく旅。いふまらへ佛乃まへ絶とる事あまりまつりて。
らるしまもるものをおもばしても摘まうときちゝるに。飢
をいれうはるき。文王乃始てしはくいさきかへるふるりたが

たまひ。ゑてしいら様の。むかしより今乃梅しるしものがたり。
琴も唱弁も古代乃まゝにして。枝もさゝれる華所
幸あると。志ゆふぶかく。ふかき所の猶それぞれにとゞかし

きや

讃

西行上人像讃　芭蕉

神農像讃　涼兎

團扇賛　荊口

入学賛　許六

紫芝之図賛　許六

讃

讃賛類

五老井許六

西行上人像讃

芭蕉

すてはてゝ。身はなきものとおもへども。雪のふる
ふる日は寒し。
さむくこそあれ。花のふる日は
うかれこそすれ。

神農像讃

涼菟

○野にすみ林に寝る人ハ。是を神とも佛ともいはん。世の薦かぶりて涼気合たり。何もかもさがしての聖いにしへの神だ。十善乃位をおりして。まづ百草を嘗こゝろみ給ひ。さいはへ。春の野にあそびまし。瓶味噌をあつかひとひ給ふ。未だしてたまへらんかすかにも神かが活計なり。

神農も　おもへど薊　野蒜かな

團扇賛

荊口

○謡あれば歌あり。されバ恋もあり。おほくは班女が似せ絵つらひご姫ぞ古来乃素なる事。中にも山崎の宗鑑法師が

月に柄をさしたらバよき団扇かなといへるうたを見出しなりし。上弦下弦とて。月乃秋に入ぬ合居も出来なし。今当流乃ちからたハ。そろの傍乃炙餅。いろいろ人の一帯にて。塩梅よしと賛して曰

涼しさつきてあふげば花バよき団扇かな

入學ノ賛

許六

一 儒家何がし猶子。洛にして入ッて道をまなぶ。賀して云く。こゝろざしは櫞樟七年乃才といふ也。鈍にして一息し、急堂をこしらへて。大木が幅するまであるべし。朝暮にかうべし。

本箱にしまりなる桐乃若葉かな

紫芝園ノ賛

五老井四絶之一絶也

許六

一 西亜芝乃さかるころ。主君仁義ある国なれ。かなしきを出し、ほとゝ泰平まち久乃世をさゝぐなれ。いとめでたくしぎ社ゆゑ

代にありしくもがむかしさよ。さ後心なくさうして定め置うちまする代もあかぬきりし。又地霊なす社ハ生ともともいへまであるにまよいそく。東坡翁に人家にあそぶ堂西に小園あらそ。古井乃石上に石芝あかれ。上に紫芝を生ぜしめて賞ふ。味ひ鶏蘇にちかしとて。予が五老井乃上に。艸字の芝あらむ。こち西に紫芝の宮あかり。さまざま坡翁が芝なり。余が五老乃地なる物なるも。戯に小賛して云

霊芝之よ

田まの孫のことなるるしなる社

禅川僧まん如言となる事多きに

我まく。以にし風まん韓氏に捷にあかれて云。是れ乃執

書

戦郎にいやしといへども。漢はさえてて。元帥に頌りつく。
終に大漢を興す。然れども又同じ。丞相とらふ名物
乃筆硯は。魚然居何がし。稀乃鉄然なる哉。達人とりて首
貫乃道をるせる。重用ひしなり。月ひる知ざる人すか。
あるしこし。然文乃出しおくれ。出損になる手多く紙。

院艶書（ヰンノエンショ）

日蓮上人報書（ニチレンシヤウニンノハウショ）

書

五老井許六選

院艶書

○なかしのほすゝ梟（フクロウ）といふ名あり。鶯姫（ウグヒスヒメ）をおもいしく。文
かつはやはらぬとふすりに、そをまてとすじ。ゆくさくじも
なかなりしく。まてとせん文字乃ぬし　こんまちぞ

日蓮上人報書

○ニ杉壽壱ツ。あなしむなく云本。油乃やうな酒来、
南無妙法蓮華経と回向（ヱカウ）いたし候

以呂波文字仮序

上古日本乃文字ありて今に用来るもの。ある三字あるべし。いにしへの法よりは。漢字まじりて。おのづから乃文字ならざりし。果て古き人もなし。されど仮名字(かなじ)は也。万葉集の事より前。訓と声とは交(まじ)へ用ゆ。又神代以呂波文字ありきより。男女呼は早。これをもて文字の用を達する。源順(したがふ)が。万葉集のかなも。声と訓とのまぎれしなるが故なり。されば吉備(きび)公乃制作して。アイウエヲ乃五音を相通の文字と

も。大和假名といふ是なり。又いろは文字あり。世に
弘法の作とのミおもへるも。一決なかるべし。一説に
以呂波仁保へ土知利奴留遠。
以上十二字護命の作。
和加与太礼曽門祢奈良牟宇為乃於久也
末計不己衣天安左幾由女美之恵比毛世
寸。以上三十五字ハ弘法の作。
京乃一字ハ僧教乃作也。いろはもとは四十七字
なる故。僧教此一字を加へ。遍照寺の男女に。

手本乃字なきをすべてよまんがとて。一二三より。千万億の
数字ハ。聖徳太子のかぞへ始を。こゝに源とすといふ。又文字
空海。勤操。僧教の三師。其よ造るともいへり。又兼良
乃篆疏よハ。四十七字ハ起り給の事。彼漢声を
假て。和字としたるや。さまざまいろはを国字といひ
て。天竺震旦よも紀字とハいはずし。是よりして漢字
にして。文字出のすがたなるをや。文の跡を。古歌経
言の乃さこ語よして。おやうまく来世まで伝ふるが。然
みぞ見ぬもののかたみとも残す。此中乃字性。そのみや

また。乙にハ常やまるゝ也者けし。まづへの字ハ乀ノ乃へ
みゝく。たわずしく斜（ナナメ）なるべし。こゝ。へとえんの分（ワカチ）
そ。そハこゝするゆゑ。ちゞみえんといふなり。とハ去なり。止
乃字にあらぞ。すべていろはを訓とらるゝ。皆声を
用るにより。にくなるゝ也者は仮（カ）なれ。つ乃字に続て後に。
そしじ門乃字と仮へし。但口傳。むかし年也。世に古武
とおもひし。点をうけ不よおげ出るもものく古武よ
つるぞ。點（テン）ハ公の押（ヲサヘ）乃点なり。其の字ハおもく乃字
まして。玉篇（キヘン）に悦ゝ訛也。又をの字ハ遠の字なり。

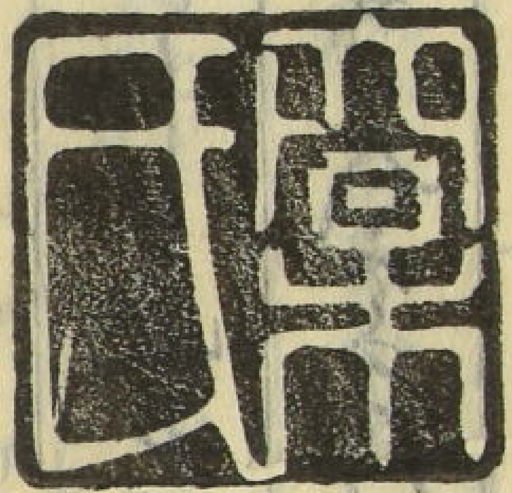
古まさ井口乃をく奥（オク）のたといふ。ゆハ衣（エ）の字にてちゞみ
えんといふ。兄（エ）乃字に似（キ）ること。橘諸兄（タチバナノモロエ）の兄なり。
上代のいろは文字と。中比今様乃字なれば。それ
をふるきへの。江戸にあやまりて。わかりね相よ
なれ果るか。そのこ。源氏物語出る詞ふさふ人もや
とあやまれるとも。紫式部もこの詞を欲さへるを。
当世野郎帽子の書ちらしてる字弁（ナリ）にハ。正字乃
俤（ヲモカゲ）もなく。此悟。江戸に出る人もなくなれ果ぬるそれ
乃字ハ家ように。なれわりいもはしらぬし。京板貰の完

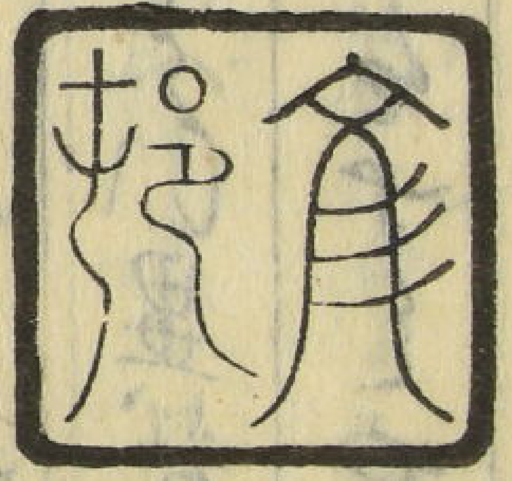
無ての乃ためばひとつ。定めおき称しがたし。蘇公の説
援物みして。是を志るさざることなきに。天下の事となれ
べし。されど大和にもちふるに用る假名字はかりく
字になりし。上古より万葉にいたりて知るべし。これ左の
陀羅尼字なる類ならん。假名遣一通に和歌のことの
志るべきはまして志ろく。古佛語の上りてた。ぬるく
吟味をもむねもしかるべし。さながら世のならひ
よはしむれば彼の正字をも志ぐし物わするを背一とせん
きこゆるなれ。文字をくべしきをたまひつかさへ文字を

こゝろしおやまゆて。古篆乃篆書より。おもひふしの道
真をまいなれ。行をまいかれ。草また古篆よりも出
そもまた行をやりしをまあるぞ。草より出より精し
かくんと知るべし。篆字にいたりて。これを源として
して志るべし。さて称は和名乃いろは文字も。此
正字ばかりて。おもしろく出ぞ。もとより異なるまで
しかりともなる。文字乃正字をまもるやうに。異
なくこゝろみあるべしと。九皋亭の主人。
実氏淀村。風俗文選かれづくしをきよ

右粹玄録文選金瑣十卷者五老井
許六先生之撰也嘗聞先師芭蕉翁
雖有此志文藁未調而没先生十
哀乎春雖然其志継其功業雖能秘
之深蔵之門人皆窺於文庫二三
子合力而偕發意為自他垂示本
出與書林井筒屋郎之梓全世一字
緩嚴無軽忽只恐僭偸罹可嘲
和歌之神譴者乎

まむかゐよ。ニ称を蹤き。時宝永三丙戌春
之月望。





[redacted]傳書

寶永三丙戌年秋九月吉日

五老井門人

洛下二條下寺町
野田弥兵衛尉梓